２００８．３．２１　第1.01版

私大研究者のための「採択率を上げる研究費申請書」の書き方、七つの基礎

早稲田大学　先進理工学部　竹内　淳

研究費には、国を主とする公的なものから、民間企業、さらに学内のものまで様々なものがあります。それらの研究費の審査員の経験のある方々から、「私大の研究者の申請書の出来は全般的に見劣りする」という話をよく聞かされます。申請書の書き方には、ある種のノウハウがあって、旧帝大などでは研究室内の教育で伝授されるようです。しかし、私大にはその伝統がないところが少なくないようです。そこで、筆者の知っている最低限のノウハウをここで紹介したいと思います。ただし、ノウハウと言っても特別なことではなく、国立大の関係者が読めば、常識の部類に入ることばかりです。おそらくインターネットで検索をかければ、他にもこの種の情報が多数見つかると思います。

以下にとりあえず七つの基礎を書いてみました。読者としては、初めて申請書を書く若い研究者の方々を想定しています。現在、ポスドクの数に比べて常勤職は少なく、科研費などの獲得額が人事選考に影響を及ぼす可能性が皆無とは言えない状況です。研究費の獲得は「研究を遂行するため」という本来の目的以外に副次的な意味も持っているようです。

１．字の大きさ　あたりまえのことですが、大きすぎても小さすぎてもいけないと言われています。申請書の内容としては、「この研究がこれほど重要であり、これだけすばらしい成果が期待でき、自分に研究費を配分してもらえば、それを必ず実現するように最大限の努力をします。もちろん、それを遂行する能力を持っていることは過去の実績が十分示しており、研究計画と準備状況も万全です。」という内容を、最大限多くの情報を使って申請書に書き込むことが望ましいわけです。したがって、字が多少小さくても多くの情報を盛り込めた方が良いというのが一つの（基本的な）考え方です。

しかし、審査員の立場から見ると、多数の申請書を読まないといけないときに、字が小さくて、細かなことが一杯書かれていて（審査員の多くは４０代以上）、主題がつかみにくいとなると、あまり良い評価は与えられないということになります。なので、適度な大きさで、かつ、行間の間隔も読みやすいものを選ぶ必要があります。これは何種類か印刷してみて最適と思われるものを選んでみればよいでしょう。なお、近年は書類としてプリントアウトせず、パソコンのディスプレイで申請書を読む場合も増えているようです。その場合、字の大きさの概念は従来とは多少異なると思います。

２．無駄な余白は（一行たりとも）あってはいけない　たとえば、研究計画や研究の意義を書く欄があったとすると、そこで最大限、申請内容のすばらしさや重要性をアピールするのが望ましいでしょう。余白があると、「この申請にはあまり書くべき内容がないのだな」と判断される（誤解される？）可能性が高まります。「余白は一行たりともあってはいけない」と書くと言い過ぎかもしれませんが、三行分はない方がよいと思います。なお、無理に余白を埋めるために冗長になることや、同じ文章を複数回繰り返すのは（一つの欄においても、申請書全体においても）逆効果になります。

３．研究計画は具体的に　申請内容は、充分に計画を練って、真剣に検討したものの方が採択される可能性が高まります。なので、今にも研究に着手できるような具体性を持って研究計画を練り上げ、真剣に検討した計画を具体的に記載しましょう。「まだ計画の大筋しか決めていなくて、あらましししか書けない」、というのでは採択される確率は恐ろしく低くなります。

ただし、度を越した具体性は有害で、研究手法のあまり細かいところまでこまごまと書くと、審査員が計画の大筋を見失う恐れがあるので、注意しましょう。

４．高額な装置や費用の合理性を明確に書く　申請内容の最も大きな費用については、なぜそれが必要で、研究費を配分されれば、その費用を使うことによって、どんなにすばらしい成果がうまれるかを明確に書きましょう。たとえば、総額５００万円の申請内容で、ほとんどの記述が１００万円分の費用を中心に記載されていて、「なお、予備実験として〇〇装置を購入する」と書いて４００万円の装置購入に軽く触れただけだとしたら、審査員にはその４００万円が何故必要かがわからないので、ほとんど採択される可能性はないでしょう。

５．研究遂行能力が高いことを示す　研究は新しいものへのチャレンジなので必ず未知の部分が存在します。未知は魅力ですが、同時に「賭け」でもあります。審査員が読んで、この人に研究費を配分すればすばらしい成果が生まれそうだなと思ってもらえるように、研究の準備状況や研究能力、過去の実績などをアピールした方が良いでしょう。もちろん、関連する過去の自分の論文の実績は明確に記載するのが望ましいでしょう。

６．審査員を専門家と思ってはいけない　審査員にどういう人が選ばれるかは、各研究費によってかなり異なります。過去の審査員が公表されているものについては、どういう人が審査員になったか調べた方が良いでしょう。自分の申請分野の審査員として、（自分の）専門分野と大きくかけ離れた人が選ばれていた場合は、現在の審査員（通常は公表されていない場合が多い）もそれぐらいブロードバンドである可能性が高いので、そういう人にもわかってもらえるように書く必要があります。

７．大事なところには太字やゴシックを使いグラフや図はカラーにする　太字やゴシックは教科書や参考書に使われている方法ですが、重要なところは強調しましょう。図やグラフを使うことが許されている場合は使ったほうがよいでしょう。ただし、審査員が図やグラフを眺めても中身がさっぱりわからないというのでは逆効果です。理想を言えば、（本文を読まなくても）図とキャプションだけで研究の重要性がなるべくわかるのが望ましいでしょう。

さて、以上で七つです。これは筆者からの一提案にすぎないので、他にも重要なポイントがあるかもしれませんし、逆に適切ではないものも含まれているかもしれません。ご自身のご判断で参考にしていただければと思います。